

第67回名古屋春栄会
演目のあらまし

令和6年1月14日

名古屋春栄会事務局

目 次

翁（おきな）	1
老松（おいまつ）	2
小督（こごう）	3
昭君（しょうくん）	4
鶴亀（つるかめ）	5
半部（はしとみ）	6
井筒（いづつ）	7
嵐山（あらしやま）	8
羽衣（はごろも）	9
六浦（むつら）	10
殺生石（せっしょうせき）	11
西行桜（さいぎょうざくら）	12
清経（きよつね）	13
高砂（たかさご）	14
〔能のミ二知識〕	15

このリーフレットは、第67回名古屋春栄会の演目を解説したものです。

演目の記載順は、番組の順です。

詞章については、金春流の謡本から転載しました。

翁（おきな）

【作者】 不詳

【登場人物】 シテ：翁（面・翁）、狂言：千歳、狂言：三番叟

【概要】（素謡の部分…シテが退場するところまで）

翁は「能にして能にあらず」と言われています。演劇性を持たない、天下泰平、国土安全、五穀豊穰を祈願する儀式としての舞のみの能です。翁、千歳、三番叟の3人がそれぞれ別に舞を舞います。颯爽たる千歳の舞、荘重な翁の舞と続き、その後、翁は退場し、千歳と三番叟の問答の後、三番叟が「揉之段」と「鈴之段」という2つの力強い舞を舞います。

【詞章】

シテ どうどうたたりたたりら。たたりらりらりらりどう。

地謡 ちりやたたりたたりら。たたりらりらりらりどう。

シテ 所千代までおわしませ。

地謡 われらも千秋さむらおう。

シテ 鶴と亀との齡にて。

地謡 幸い心にまかせたり。

シテ どうどうたたりたたりら。

地謡 ちりやたたりたたりら。たたりらりらりらりどう。

千才 鳴るは瀧の水。鳴るは瀧の水。日は照るとも。

地謡 たえずとうたり。ありうどうどう。

千才 たえずとうたり。たえずとうたり。

<千才舞>

千才 所千代までおわしませ。われらも千秋さむらおう。鳴るは瀧の水。

日は照るとも。

地謡 たえずとうたり。ありうどうどう。

<千才舞>

シテ あげまきやとんどや。

地謡 よばかりやとんどや。

シテ ざしていたれども。

地謡 まいろうれんげじや。とんどや。

シテ 千早ふる。神のひこさの昔より。ひさしかれとぞよわい。

地謡 そよやりちや。とんどや。

シテ 千年の鶴は。万才楽と歌うたり。又万代の池の亀は。甲に三極を備えり。

天下泰平国土安穩。今日のご祈祷なり。ありわらや。なじよの翁ども。

地謡 あれはなじよの翁ども。そやいづくの。翁ども。

シテ そよや。

<翁舞>

シテ 千秋万才の。喜びの舞なれば。一舞まおう万才楽。

地謡 万才楽。

シテ 万才楽。

地謡 万才楽。

老松（おいまつ）

【分類】初番目物（脇能＝老神物） *真ノ序ノ舞

【主人公】前シテ：老人（面・小尉）、後シテ：老松の神（面・石王尉）

【作者】世阿弥

【あらすじ】（仕舞の部分...下線部）

都の西の方に住む梅津の某は、北野天満宮の夢のお告げを蒙り、筑紫国（福岡県）の安楽寺へ参詣することにします。はるばると旅をして、菅原道真の菩提寺である安楽寺へ着くと、老人と若い男がやって来て、梅と桜のことを述べ、花盛りの梅に垣を作ります。梅津の某は、彼等に言葉をかけ、有名な飛梅はどれかと問うと、神木であるから紅梅殿と崇めなさいとたしなめられ、同じく神木である老松についても教えられます。さらに梅津の某の頼みで、社殿の周辺の景色を述べ、松や梅が天神の末社として栄えていることを示し、中国では、梅は文学を好むので「好文木」といわれ、松は秦の始皇帝の雨やどりを助けたので「大夫」の位を授けられた故事などを教えたあと、神隠れします。

<中入>

おどろいた梅津の某は、供の者に土地の人を呼びにやらせ、その人から詳しく道真の事蹟や道真を慕って飛んできた梅、後を追ってきた松の話を聞きます。里人の勧めで梅津の某の一行は、松陰で旅寝をして神のお告げを待ちます。すると、老松の神霊が、紅梅殿に呼びかけながら登場し、のどかな春を祝って舞を舞い、君の長寿を祝い、御代の永遠をことほぎます。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

さす枝の。さす枝の。梢は若木の花の袖。これは老木の神松の。これは老木の神松の。千代に八千代に。さざれ石の。巖となりて。苔のむすまで。苔のむすまで。松竹。鶴亀の。齡をさずくるこの君の。ゆくすえ守れと我が神託の。告を知らする。松風も梅も。久しき春こそ。めでたけれ。

小督（こごう）

【分 類】 四番目物（現在物＝侍物） *男舞
【作 者】 金春禅竹
【主人公】 シテ：源仲国（直面〔ひためん＝素顔〕）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

小督の局は、高倉帝の深い寵愛を受けていましたが、平清盛の娘徳子が帝の中宮となったので、清盛の権勢をはばかりて宮中を去り、姿を隠してしまいます。高倉院はそのことを日夜嘆いておられました。小督が嵯峨野のあたりにいるという噂をお聞きになり、早速捜し出すように勅命を弾正大弼源仲国のもとへおつかわしになります。折から八月十五夜、小督はきっと琴を引かれるでしょうから、その音を使りに捜すことにしようとお答えすると、院は寮の御馬を下さったので、仲国はそれに乗って急いで出かけます。

<中入>

嵯峨野の小督の隠れ家では、悲しい思いを琴の音でまぎらわそうと、局は侍女たちと語り合っています。仲国は名月の嵯峨野を馬で馳せめぐりますが、ただ片折戸をしたところというだけが目当てなので、捜しあぐねています。やがて法輪寺のあたりで、かすかに琴の音が聞こえてくるので、耳をすますと「想夫恋」の曲です。その音をたよりに、局の隠れ家を尋ねあてますが、小督は戸を閉じて中へ入れようとしません。侍女のとりなしで対面した仲国は、院の御文を渡し、御返事を請います。小督は院の思召しに感泣します。そして仲国はなごりを惜しむ酒宴に舞を舞い、小督に見送られて都に帰ります。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

木枯に。吹き合わすめる。笛の音を引き留むべき言の葉もなし。言の葉もなし。言の葉もなし。言の葉もなき君の御心。われらが身までも物思いに。立ち舞うべくもあらぬ心。今は帰りて嬉しさを。何に包まん唐衣豊に。袖打ち合わせ御暇申し。急ぐ心も勇める駒に。ゆらりとうち乗り。帰る姿の跡はるばると。小督は見送り仲国は。都へところ。帰りけれ。

昭君（しょうくん）

【分類】四、五番目物（鬼神物） *舞働

【作者】不詳

【主人公】昭君の父・白桃（面・小尉）、後シテ：呼韓邪単于の霊（面・小癡見）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

昔、中国の漢の皇帝は、胡国と和平のために、三千人の侍女の中から王昭君を選び、胡王の呼韓邪単于〔こかんやせんう〕に贈りました。昭君の年老いた父の白桃〔はくとう〕と母の王母〔おうぼ〕はその事をいたく悲しんでいます。それに同情した里人が慰めに行くと、老夫婦は柳の木の下を掃き清めています。そして、この柳は、娘の昭君が胡国に行くときに「自分が彼の地で死ねばこの木も枯れましょう」と言って植えていったのだが、見れば早や片枝が枯れてきたと嘆きます。そして涙にくれつつも、昭君が胡国に連れて行かれた訳を物語り、さらに桃葉〔とうよう〕という人が死んだ仙女の姿を鏡に映る形見の桃の花に見出したという故事を思い出し、鏡には恋しく思う人の映った例もあるので、昭君の形見の柳を鏡に映せば、娘の姿が見えるかも知れぬと、鏡に向かって泣き伏します。

<中入>

やがて、昭君の幽魂が現れると、ついで単于の幽霊も父母に直面せんと現れ出ます。しかし、単于は鏡に映った鬼神のような恐ろしい自分の姿を恥じて消え失せ、昭君の花の姿ばかりが鏡に残り、物思いに沈む父母を慰めます。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

荆棘〔おどろ〕をいただく髪筋は。荆棘をいただく髪筋は。主を離れて空にあり。元結さらにたまらねば。真葛〔さねかずら〕にて結びさげ。耳には鎖をさげたれば。鬼神と見たもう。姿も恥かし。鏡に寄り添い立っても居ても。鬼とは見れども人とは見えず。それかあらぬか我ながら。恐ろしかりける顔つきかな。面目なしとて立ち帰る。ただ昭君の眉墨は。ただ昭君の眉墨は。柳の色に異らず。罪を現わす浄玻璃や。それも隠れはよもあらじ。花かと見えて曇る日は。うわの空なるもの思い。影もほのかに三日月の。曇らぬみ代の心こそ。まことを思う。鏡なれ。まことを思う。鏡なれ。

鶴亀（つるかめ）

【分類】初番目物（脇能＝唐物） *楽

【作者】不詳

【主人公】シテ：皇帝（直面〔ひためん＝素顔〕）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

昔、中国では年の始めに、華麗な宮殿で、四季の節会の最初の儀式が行われました。まず、官人が出て、御代を讃え、皇帝が月宮殿に行幸なる由を触れます。皇帝は大臣たちを従えて登場し、宮殿に着座して、群臣から拝賀を受けます。ついで大臣は毎年の嘉例により、鶴亀を舞わせることを奏聞します。池の水ぎわに遊ぶ鶴と亀は、皇帝の長寿を讃えてめでたく舞い納めると、皇帝も喜び、国土の繁栄を祝って、自ら舞を舞い、やがて長生殿へと帰っていきます。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

月宮殿の白衣の袂。月宮殿の白衣の袂の。いろいろ妙なる。花の袖。秋は時雨の紅葉の葉袖。冬は冴えゆく雪の袂を。ひるがえす衣も薄紫の。雲の上人の舞楽のかずかず。げいしょう羽衣の曲をなせば。山河草木国土豊に千代万代と。祝い奉り。官人駕輿丁御輿を早め。君の齡も長生殿に。君の齡も長生殿に。還御なるこそ。めでたけれ。

半部（はしとみ）

【分 類】三番目物（鬘物） ＊序ノ舞

【作 者】内藤藤左衛門

【主人公】前シテ：里の女（面・増）、後シテ：夕顔の女の霊（面・増）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

京の都の紫野雲林院の僧が、九十日にわたる夏の修行も終わりが近づいたので、修行の間に仏に供えた花々の供養を行います。すると、白い花が開いたかのように、どこからともなく一人の女が現れて、花を捧げます。僧が女に名を尋ねると、ただ夕顔の花と答えるだけで、その名を明かしません。僧がさらに問いただすと、五条あたりの者とだけ言って、活けられた花の陰に消え失せてしまいます。

<中入>

僧が不思議な思いをしていると、ちょうどそのあたりの者がやって来て、光源氏と夕顔の物語を聞かせ、その女性は夕顔の幽霊であろうと述べて、僧に五条あたりへ弔いに行くことを勧めます。僧が五条あたりを訪ねてみると、荒れ果てた一軒の家に、夕顔の花が咲いています。僧が、夕陽が落ち、月がさし込むこの家の風情を眺め、『源氏物語』の昔を偲んでいると、半部を押し上げて、一人の女性が現れます。女は、光源氏と夕顔の花の縁で歌を取り交わし、契りを結んだ楽しい恋の思い出を物語り、舞を舞います。そして、夜明けを告げる鐘と共に僧に別れを告げ、また半部の中へ消えてしまいます。しかし、そのすべては僧の夢の中のことでした。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

折りてこそ。それかとも見ぬ。たそかれに。ほのぼの見えし。花の夕顔。花の夕顔。
花の夕顔。終の宿りは知らせ申しつ。常には弔らい。おわしませと。木綿附の鳥の
音。鐘もしきりに。告げわたる東雲。あさまにもなりぬべき。明けぬ先にと夕顔の
宿り。明けぬ先にと夕顔の宿りの。また半部の内に入りて。そのまま夢とぞ。なり
にける。

井筒（いづつ）

【分 類】三番目物（鬘物） ＊序ノ舞

【作 者】世阿弥

【主人公】前シテ：里女（面：小面）、後シテ：井筒の女の霊（面：小面）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

諸国一見を志す旅僧が、奈良から初瀬へ行く途中、在原寺を訪れ、業平とその妻を弔います。するとそこへ、一人の里女が現れ、井戸の水を汲み上げ、古塚に手向けています。僧がいぶかって尋ねると、それが業平の墓であることを教えるので、業平のゆかりの者かとただすと、女はそれを否定しつつも、問われるままに次のような事を語ります。業平は紀有常の娘と浅からず契りながらも、一時、高安の里の女の許に通っていたが、「風吹けば 沖つ白波 龍田山 夜半にや君が 独り行くらん」という歌を詠んで、自分の身を案じてくれる妻の真心にうたれて、元に戻った話や、幼い頃、この井筒のそばで二人遊びたわむれたが、幼馴染の親しさが長じて恋となり、「筒井筒 井筒にかけし まろが丈 生ひにけらしな 妹見ざる間に」「比べこし 振分髪も 肩過ぎぬ 君ならずして 誰か上ぐべき」と歌を詠みかわして夫婦となった話などをします。そして、自分こそ井筒の女と呼ばれた有常の娘だと名乗って、井筒の陰に姿を消します。

<中入>

旅僧は来合せた櫛本の者からも業平夫婦の話聞き、先の女は有常の娘の化身であるから弔ってやるよう勧められます。旅僧は、回向をし、夢の出会いを期待して仮寝します。すると井筒の女の霊が、業平の形見の衣裳をつけて現れ、舞を舞い、我が姿を井筒の水に映して業平の面影をなつかしみますが、やがて夜明けと共にその姿は消え、僧の夢も覚めます。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

ここに来て。昔を帰す。ありわらの。寺井に澄める。月ぞさやけき。月ぞさやけき。
月やあらぬ。春や昔と詠めしも。いつのころぞや。筒井筒。筒井筒。井筒にかけし。
まろが丈。生いけらしな。老いにけるぞや。さながら見みえし。昔男の。かむり直
衣は。女とも見えず。男なりけり。業平の面影。見れば。懐かしや。われながら懐
かしや。亡夫魄霊の姿は。萎める花の。色無うて匂い。残りて在原の。寺の鐘もほ
のぼのと。明くれば古寺の。松風や芭蕉葉の夢も。破れて覚めにけり。夢は破れ。
覚めにけり。

嵐山（あらしやま）

【分類】初番目物（協能） ＊中ノ舞

【作者】金春禅鳳

【主人公】前シテ：花守の老人（面・小尉）、後シテ：蔵王権現（面・大飛出）

【あらすじ】（今回の連吟の部分…下線部）

嵯峨帝に仕える臣下が、勅命を受けて、嵐山へ桜の咲き具合を見に行きます。というのは大和吉野山が桜の名所であることは有名ですが、あまりに都から遠いので、花見の御幸も簡単にはできません。それで吉野の千本の桜を、都近くの嵐山に移し植えられましたが、吉野の花が今は盛りだというので、嵐山の花もよく咲いているのではないか、というお尋ねがあったからです。勅使一行が嵐山につくと、老人夫婦が現れ、木陰を清め、花に向かって祈念します。勅使がその謂れを聞くと、老人夫婦は、この千本の桜は、吉野から移されたものだから、木守、勝手の二神が時折現れて守護する神木であり、嵐という名だが、花を散らさないのだと語ります。やがて自分達こそ木守、勝手の神なのだと言乗り、再会を約して、雲に乗って吉野の方に飛び去ります。

<中入>

そのあと、蔵王権現の末社の神が現れ、勅使一行に対して舞を舞ってもてなしていると、木守、勝手の二神が今度は神の姿で現れ、嵐山の美景を眺めつつ舞楽を奏します。続いて蔵王権現も現れて、衆生の苦患を助け、国土を守ると誓い、栄ゆる御代を祝福します。

【詞章】（今回の連吟の部分の抜粋）

三吉野の。三吉野の。千本の花の種植えて。嵐山あらたなる。神遊びぞ目出たき。この神遊びぞ目出たき。いろいろの。いろいろの。花こそまじれ。白雪の。子守勝手の。恵みなれや松の色。青根が峰ここに。青根が峰ここに。小倉山も見えたり。向いは嵯峨の原。下は大堰川の。岩根に波かかる。亀山も見えたり。万代と。万代と。囃せ囃せ神遊び。千早ふる。

羽衣（はごろも）

【分類】 三番目物（鬘物＝精天人物） ＊序ノ舞

【作者】 不詳

【主人公】 シテ：天人（面・増女）

【あらすじ】（今回の仕舞 [キリ] の部分…下線部）

駿河国（静岡県）三保の松原に住む白龍という漁師が今日も釣にやって来ます。そして、のどかな浦の景色を眺めていると、いい匂いがしてきます。あたりを見廻すと、一本の松の木の枝に美しい衣がかかっています。そこで、家宝にでもしようとして持って帰りかけると、一人の女性が現れて呼び止め、それは自分のものだから返してほしいと頼みます。その女性が天人であり、その衣が天の羽衣であることを聞かされた白龍は、そんなに珍しいものかと喜び、国の宝にしようと思返そうとしません。天人は羽衣がなくては天に帰れないと、空を仰いで嘆き悲しみます。その姿があまりに哀れなので、白龍は、羽衣を戻すかわりに、天人の舞楽を見せてほしいと頼みます。天人は喜んで承知し、羽衣を着て月世界における天人の生活の面白さや、三保の松原の春景色をたたえた舞を舞いながら、天空へと上っていきます。

【詞章】（今回の仕舞 [キリ] の部分の抜粋）

あずま遊びのかずかずに。あずま遊びのかずかずに。その名も月の。色人は。三五夜中の空にまた。満願真如の影となり。御願円満国土成就。七宝充満の宝をふらし。国土にこれを施したもう。さるほどに。時移って。天の羽衣。浦風にたなびきたなびく。三保の松原浮き島が雲の。足高山や富士の高根。かすかになりて天つみ空の。霞にまぎれて失せにけり。

六浦（むつら）

【分 類】三番目物（鬘物＝精天仙物） ＊序ノ舞

【作 者】金春禅竹（?）

【主人公】前シテ：里女（面：小面）、後シテ：楓の精（面：小面）

【あらすじ】（今回の仕舞 [キリ] の部分…下線部）

都の僧が東国行脚の途中、相模国（神奈川県）六浦の称名寺に立ち寄ると、折りしも山々の木々が今を盛りと紅葉しているのに、この寺の一本の楓だけが少しも紅葉していないので、不審に思ってみていると、ひとりの里の女が現れます。女は、昔、鎌倉中納言為相卿がこの寺に来た時、この木だけが山々に先立って紅葉しているのを見て、和歌を一首詠じたところ、この木は喜び、功成り名を遂げた上は身を退くのが天の道と信じて、それ以来常緑樹のようになったのです、実は私は楓の精であると言って秋草の中に消え失せます。

<中入>

その夜、僧がここで過ごしていると、楓の精が現れて、草木も成仏できる仏徳を称えて舞をまいますが、明け方になると影の如く消えてしまいました。

【詞章】（今回の仕舞 [キリ] の部分の抜粋）

秋の夜の。千夜を一夜に。重ねても。言葉残りて。鳥や鳴かまし。八声の鳥も数数に。八声の鳥も数数に。鐘も聞こゆる。明け方の空の。所は六浦の浦風山風。吹きしおり吹きしおり。散るもみじ葉の。月に照り添いて。からくれないの庭の面。明けなば恥かし。暇申して帰る山路に。行くかと思えば木の間の月の。行くかと思えば木の間の月の。かげろう姿と。なりにけり。

殺生石（せっしょうせき）

【分 類】五番目物（鬼畜物）

【作 者】日下左阿弥

【主人公】前シテ：里女（面・増女）、後シテ：野干の精（面・小飛出）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

玄翁という高僧が、能力〔のうりき〕と奥州から都へ上る途中、下野国（栃木県）那須野の原へさしかかります。空を飛ぶ鳥が、とある石の上を飛ぶと落ちるので、不審に思っで見ていると、一人の里の女が現れ、その石は殺生石といい、人畜を害する恐ろしい石だから、近寄らないようにと注意します。玄翁がその由来を尋ねると、女は次のような話をします。昔、鳥羽院につかえていた玉藻ノ前は、才色兼備の女性で、帝もお気に入りであったが、実は化生の者であった。帝を悩ませようと近づいたが、その正体を見破られたのでこの野に逃げたが、殺されたため、その魂が殺生石になったのだと詳しく語ります。そして、実は自分はその石の魂であるとあかし、夜になれば懺悔のため姿を現すと言いつつ、石の中に隠れます。

<中入>

玄翁が石に向かって仏事をなし、引導を与えると、石は二つに割れ、中から野干（狐）が現れます。野干は、天竺（インド）では斑足太子〔はんそくたいし〕の塚の神、大唐（中国）では幽王の後、褒姒〔ほうじ〕となって世を乱し、日本へ渡り、この国をも滅ぼそうと玉藻ノ前という美女に変じて宮廷に上ったが、安倍泰成の祈祷で都を追われ、その後、この野に隠れ住んだが、狩り出されて遂には射殺され、その執心が殺生石となっていたのでした。しかし、野干（狐）は、今、あなたの供養を受けたので、以後、悪事はしないと誓って消え失せます。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

兩介は狩装束にて。兩介は狩装束にて数万騎那須野を取り込めて。草をわかって狩りけるに。身を何と那須野の原に。現れ出ざるを狩人の。追つまくつつきくりにつけて。矢の下に射つ伏せられて。即時に命をいたずらに。那須野の原の露と消えても。なほ執心は。この野に残って。殺生石となって。人を取る事多年なれども。今会いがたき御法を受けて。この後悪事をいたす事。あるべからずと御僧に。約束固き石となって。約束固き。石となって。鬼神の姿は。失せにけり。

西行桜（さいぎょうざくら）

【分類】 三番目物（鬘物＝精天仙物） ＊序ノ舞

【作者】 世阿弥

【主人公】 シテ：老桜の精（面・石王尉）

【あらすじ】（仕舞〔クセ〕の部分…下線部）

京都西山にある西行の庵室には、老木の桜が今は盛りと咲いています。西行は、一人心静かに花を楽しもうと、今年は花見禁制にする由を能力〔のうりき〕に伝え、その事を触れさせます。そこへ、ここかしこと花の名所を訪ねて、春の日を送っている下京辺の人々が、西行の庵の桜が盛りと聞いて、やって来ます。西行は煩わしくは思いますが、花を愛する気持ちを汲んで断りかね、柴垣の戸を開けて一行を請じ入れます。しかし浮世を離れて花を眺めたいと思っている西行にとっては、俗の花見客が大勢やって来るのは、やはり迷惑です。そして思わず、「花見んと 群れつつ人の 来るのみぞ あたら桜の 咎にはありける」と口ずさみますが、花見の人達と共に花を愛で仮寝をします。

その夜、西行の夢の中に、老木から白髪のお翁が現れて、西行の先刻の歌の心を問いただし、桜は非情無心の草木であるから、浮世の咎はないのだと言います。そして自分は桜の精だと名乗り、歌仙西行に逢えたことを喜び、名所の桜を讃えて舞を舞い、春の夜を楽しみますが、やがて夜が明けると、老桜の精は別れを告げて消え失せ、西行の夢も覚めます。あたりは一面に敷き詰めたように落花が散り、人影もありません。

【詞章】（仕舞〔クセ〕の部分の抜粋）

見渡せば。柳桜をこきまぜて。都は春の錦。さんらんたり。千本の桜を植え置きその色。所の名に見する。千本の花ざかり。雲路や雪に残るらん。毘沙門堂の花ざかり。四王天の栄花も。これにはいかで勝るべき。上なる黒谷下川原。むかし遍昭僧正の。浮世をいとし華頂山。鶯のみ山の花の色。枯れにし鶴の林まで。思い知られてあわれなり。清水寺の地主の花。松吹く風の音羽山。ここはまた嵐山。戸無瀬に落つる。滝つ波までも。花は大井川。井堰に雪や。かかるらん。

清経（きよつね）

【分類】二番目物（修羅物＝公達物）

【作者】世阿弥

【主人公】シテ：平清経（面・中將）

【あらすじ】（仕舞 [キリ] の部分…下線部）

平清経の家臣、淡津三郎はひそかに一人で九州から都へ戻って来ます。清経は、平家一門と共に幼帝を奉じて都落ちし、西国へと逃れますが、敗戦につぐ敗戦に、前途を絶望して、豊前国（福岡県）柳ヶ浦で、船から身を投げて果ててしまいます。三郎は、その形見の黒髪を、清経の妻に届けるために、戻って来たのです。その話を聞いた妻は、せめて討ち死にするか病死ならともかく、自分を残して自殺するとは、あんまりだと嘆き悲しみます。そして形見の黒髪も見るに忍びず、涙ながらに床につくと、夢の中に清経の霊が現れ、妻に呼びかけます。妻は嬉しくもあるが、再び生きて姿を見せてくれなかったことを恨みます。清経は、都を落ちた平家一門が、筑紫での戦にも敗れ、願をかけた宇佐八幡の神からも見放されたいきさつ、敗戦の恐ろしさ、不安、心細さを話して聞かせ、望みを失って月の美しい夜ふけ、西海の船上で横笛を吹き、今様を謡って入水したことを物語って、妻を納得させようとしています。続いて修羅道の苦しみを見せますが、実は入水に際して十念を唱えた功德で成仏し得たと述べ、消えてゆきます。

【詞章】（仕舞 [キリ] の部分の抜粋）

さて、修羅道に落ちこちの。さて修羅道におちこちの。立つ木は敵雨は矢先。月は清剣山は鉄城。雲の旗手をついて。驕慢の剣をそろえて。じゃけんのまなこの光。愛欲とんいちつうげん道場。無明も法性も。乱るるかたき。打つは波引くほうしお。これまでなりやまことは最後の十念乱れぬみ法の舟に。頼みしままに疑いもなく。げにも心は清経が。げにも心は清経が。仏果を得しこそ有難けれ。

高砂（たかさご）

【分類】初番目物（脇能＝男神物） *神舞

【作者】世阿弥

【主人公】前シテ：老翁（面・小尉）、後シテ：住吉明神（面・邯鄲男）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

肥後国（熊本県）、阿蘇の宮の神主・友成は、都見物を思い立ち旅に出ます。途中、播州（兵庫県）高砂に立ち寄り、浦の景色を眺めていると、そこへ竹杷（熊手）と杉箒を持った老夫婦がやって来て、松の木陰を掃き清めます。友成は、有名な高砂の松はどれかと尋ね、また、高砂の松と住吉の松とは場所が離れているのに、なぜ相生の松と呼ばれるのかと、その理由を尋ねます。老人は、この松こそ高砂の松であると語り、たとえ場所を隔てていても夫婦の仲は心が通うものだ、現にこの姥は当所の者、尉は住吉の者だと言います。そして老夫婦は、さまざまな故事を引いて松のめでたさを語り、御代を寿ぎます。やがて二人は、実は相生の松の精であることを明かし、住吉でお待ちしていると告げて、小舟に乗って沖の方へ消えていきます。

<中入>

友成は、土地の者に再び相生の松のことについて聞き、先程の老夫婦の話をする、それは奇なことだから、早速自分の新造の舟に乗って住吉へ行くことを勧められます。そこで、友成たちも高砂の浦から舟で住吉へ急ぎます。住吉へ着くと、残雪が月光に映える頃、住吉明神が出現し、千秋万歳を祝って颯爽と舞います。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

げにさまざまの舞姫の。声もすむなり住の江の。松陰もうつるなる。青海波とはこれやらん。神と君との道すぐに。都の春にゆくべくは。それぞ還城楽の舞。さて万歳の。小忌衣。指すかいなには。悪魔を払い。おさむる手には。壽福をいただき。千秋楽は民をなで。万歳楽には命をのぶ。相生の松風。さっさっの声を楽しむ。さっさっの声を楽しむ。

能のミニ知識

★能の分類

五番立て…能の催しは、一日に五番(五曲)が正式とされています。異なる雰囲気のものを実効果的に組み合わせるノウハウとして、神(神がシテ)・男(修羅に苦しむ男性がシテ)・女(美しい女性がシテ)・狂(狂女などがシテ)・鬼(鬼畜がシテ)の順に演じます。ただし、鬼がシテ(五番目物)であっても内容がめでたいため初番目に演じられる場合がある(略脇能物)など、完全に固定されているわけではありません。

○初番目物(脇能)

江戸時代の正式の演能では「翁」につづいて行われた能です。

神を主人公として、神社の縁起や神威を説き、国の繁栄を予祝し聖代を寿ぐ内容で、演劇性よりは祭祀性の強い作品です。

○二番目物(修羅能)

仏教では、戦にたずさわった者は修羅道に堕ちて苦しむといわれます。シテ(主に源平の武将の亡霊)が、旅僧の前に現われ、合戦の様子を見せ、死後の責苦を訴え、回向を願う作品です。

○三番目物(鬘[かづら]物)

シテ(『源氏物語』など王朝文芸のヒロインや歴史上の美女、植物の精など)が、ありし日の恋物語などを回想し静かに舞を舞うという構成です。

全般に演劇性よりも舞踊性・音楽性が強く、能の理想美である幽玄の風情を追求した作品が多いです。

○四番目物(雑能)

他の分類に属さない能が、ここに集められています。

男女の「物狂物」、史上の武士を主人公とした「現在物」、非業に死んだ人の「執心・怨霊物」、中国人をシテとした「唐物」など、そのスタイルは多様です。また、他の分類に比べてストーリー性・演劇性が強い作品が多いです。

○五番目物(切[きり]能)

一日の番組の最後に置かれる能です。「ピン(一番)からキリ(最後)まで」のキリです。

見た目に派手でスペクタクル性の強いものが多いため、フィナーレとして演じられます。人間以外の「鬼畜や鬼神」の能、「竜神・天狗」の能、猩々・獅子・山姥など「精霊」の類や「貴人」の早舞物などがあります。

★能の楽器

囃子方[はやしかた]…能の楽器は、笛、小鼓、大鼓、太鼓の4種類です。

この楽器を演奏する人を囃子方といいます。

笛(能管):竹製、指穴七つの横笛です。唯一のメロディ楽器です。

小鼓:左手で右肩にかついで、右手で打ちます。

大鼓:左手で左膝にのせ、右手で打ちます。

太鼓:台に据えて、二本のバチで打ちます。

★略式の演能

素謡[すうたい]

一人または数人の謡によって能一番を聞かせるものです。演者は紋付袴姿で、シテ・ツレ・ワキ・地謡などに分かれて謡います。

江戸時代に入って一般に普及した上演形態です。

独吟[どくぎん]

謡の「聞かせどころ」を独演するものです。演者は紋付袴姿です。

連吟[れんぎん]

謡の「聞かせどころ」を複数で披露するものです。演者は紋付袴姿です。

仕舞[しまい]

能一曲のうち、クセやキリなどのシテの所作の「見せどころ」だけを舞うものです(通常5分程度)。シテは装束や面をつけず紋付袴姿で地謡(ポーカル)だけをバックにして舞います。仕舞扇をしていますが、小道具、作り物(大道具)は原則として用いませぬ。シテ一人で演じるのが普通ですが、特殊なものにシテとツレ、シテとワキ、ワキ一人、ツレと子方で演じるものもあります。

鑑賞芸としての仕舞は、江戸初期になって成立したとされています。

舞囃子[まいばやし]

舞事・働事(囃子の演奏に支えられた能の中の一番の「見せどころ」)を中心に、シテが地謡と囃子(器楽)をバックにして装束や面をつけずに舞うものです。平均して10~20分程度の長さになります。長刀や杖などの手道具は用いますが、作り物(大道具)は省略します。

舞囃子は江戸初期に少しずつ上演される形式となりましたが、徳川五代将軍綱吉が愛好し、自身も舞ったことから元禄期に盛んになったとされています。

袴能[はかまのう]

面・装束を用いず、紋付袴姿で能を演じるものです。

半能[はんのう]

前場の大半を省略し、見せ場である後場を主体に演ずるものです。

独調[どくちょう]、独鼓[どっこ]、一調[いっちょう]

謡の「聞かせどころ」を、謡と小鼓・大鼓・太鼓の奏者それぞれ一人ずつで競演するもののことをいいます。

一管[いっかん]

笛の「聞かせどころ」を独奏するものです。

一調一管[いっちょういっかん]

打楽器のうち一種類と笛の二重奏の場合と、謡を加えて三人で競演する場合があります。

素囃子[すばやし]

舞事・働事などの部分を、囃子(楽器)によって聞かせるものです。

番囃子[ばんばやし]

謡と囃子(音楽的要素)のみで、能一番を聞かせるものです。

★舞事と働事

舞事[まいごと]…抽象的な純粹舞踊。音楽にも所作にも表意性はありません。

○序ノ舞: ゆったりとして、静かで典雅な舞です。美女の霊、女体・老体の精、貴公子の霊などが舞います。

○真ノ序ノ舞: 老体の神の荘重な舞。

○中ノ舞: 基本的な舞で、テンポは中ぐらいです。主に現身の女性が舞いますが、女体の神・精仙、遊狂僧の場合もあります。

○早舞: 拍子にリズムがあり、ノリのいい舞です。テンポは中ノ舞と神舞の間ぐらいです。貴人や成仏した女性などがすがすがしく、典雅に舞います。

○男舞: 直面の現身の男(武士が多い)が舞う舞です。喜びや祝いの気持ちを表現して、速いテンポで勇壯闊達に舞います。

○神舞: 若い男体の神がテンポも速く、颯爽と舞う舞です。

○急ノ舞: テンポの速い、激しい舞です。鬼の化身やあらぶる神などが主に舞います。

○破ノ舞: 序ノ舞や中ノ舞の後に舞い添えられる短い舞です。

「舞事」の中でも、序ノ舞から急ノ舞に至る「舞ノ類」は、どれも旋律はほとんど同じです。急ノ舞に至るに従ってテンポが次第に早くなり、それに伴ってリズムが単純化する程度の違いしかありません。

これに対して次のものは、それぞれ固有の旋律を持っています。

○神楽[かぐら]: 「女体の神や神がかりした巫女」が幣を持って舞う舞です。
雅な感じの舞です

○楽[がく]: 舞楽のような感じの舞です。
中国の皇帝や童子などが舞う「異国風」の舞です。

○羯鼓[かっこ]: 羯鼓とは、腹につけてバチで打つ楽器のこと。
「遊芸者」がこの楽器を演奏しながら舞う様を模した舞です。

働事[はたらきごと]…「舞事」が抽象的な形式舞踊であるのに対し、「働事」は、ある程度表意的な所作をします。

○イロエ: 囃子に合わせて舞台を一巡する舞踏的な所作のことです。

○カケリ: 「修羅道の苦しみや物狂い、不安」などを表す所作のことです。
精神的な興奮状態、心の動揺や苦痛を表現します。

○祈り: 鬼女、悪霊が山伏や僧に祈り伏せられるというものです。
「祈祷と抵抗の一進一退」が表現されます。

○舞働[まいばたらき]: 龍神、鬼神、天狗、妖怪などが「威力を誇示」して猛々しく演ずる豪壮活発なる所作のことです。
働[はたらき]ともいいます。

このリーフレットの内容は、名古屋春栄会のホームページにも掲載しています。

<http://www.syuneikai.net>